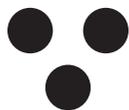




図書館のための出版キイノート 3
編集の実務と印刷・紙・製本

宮沢厚雄

樹村房



はじめに

本シリーズ「図書館のための出版キイノート」は、図書館で働く方がたすべてにとって必要と思われる出版の知識を、平易に簡明に説いたものです。出版の全体をいくつかのトピックに分け、それぞれを噛み砕いて論じています。日々の業務の一助になればと念じました。

出版 (publishing) とは、文書や図画を販売・頒布する目的で複製し、これを書籍や雑誌の形態で世に送り出す営みをいいます。狭義では書籍出版のみを指しています。定日発売の商業雑誌を全国規模で創刊するには、事業者の側に定期的に刊行し続けるだけの資本力が無ければ、成り立たせることができません。

出版の本質は、複製 (copy) にあります。中身を写し取り、オリジナルと同一のものをもう一つ作り出そうとする行為が原点です。複製を念頭に置いた素材には、古代では粘土板・木板・竹片・パピルス草・獣皮などを数えます。これらの物理的な媒体に、鋭利な用具で刻み込むか、インクや墨を用具に付着させて書き付けるといった技術的手段によって、文字や象形が表現されたのでした。

15世紀にグーテンベルク (Johannes Gutenberg) が、金属活字・油性インク・圧力印刷機を用いた活版印刷の技術を創案すると、中国から伝播してきた紙の製法と相まって、複製物を量産化する道が一気に拓けま

す。原本を肉筆で書き写し、数か月かけて一冊の写本しか仕上げられなかった作業工程が大幅に改善されました。

18世紀に著作権法（copyright law）が整備され、他人に勝手に複製されないよう無断使用を禁止する権利が確立します。著者（authorship）という概念が誕生したのです。海賊版は違法とされ、著者に対する利益還元の仕事が整ったことで、出版はまさしく産業として成立したのです。

19世紀には「読み・書き・そろばん」に始まる初等教育が義務化され、識字率が向上して大衆的な読者層が出現、出版産業は幅広い販路を得て大きく躍進します。

日本で近代的な出版産業が発展したのは、明治期です。それまでは、和紙に、和装で、墨蹟や木版印刷だった書物が、洋紙に、西洋式の製本で、活版印刷による製作へと大きく切り替わるのは、およそ明治20年代——西暦でいえば1887年以降——です。

活版印刷は、活字を組み合わせることで印刷用原版をつくり、凸版印刷にかける方式です。近代日本の出版産業を支えてきました。明治期に新聞が文明開化を告げ、大正期は娯楽と修養で雑誌の時代を築き、昭和初期には安価な全集ものが席卷します。第二次世界大戦後は週刊誌が創刊され、新聞とは異なる視点を提供。文庫や新書のブームも繰り返されました。

1970年代になると、写真植字と平版オフセット印刷の組み合わせが普及します。それは女性ファッション誌の隆盛を促し、雑誌のもつ継続性や速報性に大判のビジュアル性が加わったのでした。また、コミック誌は平成に至るまで、テレビアニメ・実写ドラマ・ゲームソフト・キャラクター商品などから成る、巨大なマンガ文化を牽引しました。

平成の1990年代も後半になると、デジタル化とネットワーク化が進みます。組版用のDTPソフトが一般化して、写真植字を退潮させます。一方で、出版のコンテンツそのものがデジタル化され、インターネットでモバイル端末機に配信されるようになって、文字情報は写真・音声・動画といった表現形式と同列になったのです。

令和の時代に本書は企画されました。紙の出版物、なかんずく書籍には、創発と蓄積に裏打ちされた職人的な技能が潜むことを確認し、そのエッセンスを受益したいというのが、そのねらいです。章立ては下記のとおり。第3章から第12章までは「編集の実務」の各論に相当します。

- 第1章 書籍と雑誌
- 第2章 編集の実務
- 第3～5章 原稿整理
- 第6章 造本設計
- 第7章 用紙選定
- 第8章 台割構成
- 第9～11章 組版指定
- 第12章 校正作業
- 第13章 印刷の工程
- 第14章 製本の工程

本書は、編集を鳥の眼でもって俯瞰した「概論」であり、本づくりのいろはを伝える「階梯」ともいえ、なおかつ、書籍に関連するキーワードを網羅した「大全」でもあろうと努めました。小品ではありながらも紙幅の許すかぎり言葉を尽くしています。出版の全体像を筋目正しく整理するのに役立つ内容です。■

目次

はじめに ——— 3

1 書籍と雑誌

————— 17

- 1. 1. 書籍(1) 定義 17
- 1. 2. 書籍(2) 版と刷 20
- 1. 3. 雑誌(1) 定義 24
- 1. 4. 雑誌(2) 継続性 26
- 1. 5. 雑誌(3) 広告掲載 29

2 編集の実務

————— 33

- 2. 1. 集めて編む 33
- 2. 2. 企画立案 36
- 2. 3. 原価計算 38

3 原稿整理(1) 漢字

—— 43

- 3. 1. 用字用語のルール 43
- 3. 2. 字種・字体・字形 45
- 3. 3. 漢字の字体(1) 常用漢字 47
- 3. 4. 漢字の字体(2) 人名用漢字 49
- 3. 5. 漢字の字体(3) JIS漢字 51

4 原稿整理(2) 仮名・数字

—— 55

- 4. 1. 漢字とひらがなの使い分け 55
- 4. 2. ひらがなの表記 57
- 4. 3. 送り仮名の付け方 59
- 4. 4. 数字の表記 61
- 4. 5. カタカナ語の書き表し方 63

5 原稿整理(3)約物

—— 67

- 5. 1. 区切り記号 67
- 5. 2. つなぎ記号 71
- 5. 3. くくり記号 73
- 5. 4. 目印記号 76
- 5. 5. 省略記号 79

6 造本設計

—— 81

- 6. 1. 平と背 81
- 6. 2. 上製本 83
- 6. 3. 並製本 85
- 6. 4. カバー=ジャケット・帯紙・函 86
- 6. 5. 見返し・花布・スピン 89
- 6. 6. 小口・ノド 91

7 用紙選定

———— 95

- 7. 1. 紙の製法 95
- 7. 2. 判型(1) A列/B列規格判 99
- 7. 3. 判型(2) 菊判・四六判 101
- 7. 4. 紙の種類 103
- 7. 5. 印刷用紙 105
- 7. 6. 紙の重さ 108

8 台割構成

———— III

- 8. 1. 前付 III
- 8. 2. 本文 116
- 8. 3. 後付 118

9 組版指定(1) 版面形成

———— 123

- 9. 1. 組版とその指定 123
- 9. 2. 版面の配置 125
- 9. 3. 文字組みの方向 129
- 9. 4. 文字の書体 131
- 9. 5. 仮想正方形(仮想ボディ) 133
- 9. 6. 文字のサイズ(1) ポイント制 135
- 9. 7. 文字のサイズ(2) 号数制 137
- 9. 8. 文字のサイズ(3) 級数制 138
- 9. 9. 字間・行間 141

10 組版指定(2) 内部属性

———— 143

- 10. 1. 段落と字下げ 143
- 10. 2. 行頭と行末 145
- 10. 3. ウィドウとオーファン 150
- 10. 4. 行取り 151
- 10. 5. 行揃え 153

11 組版指定(3) 外部属性

———— 157

- 11. 1. 注記 157
- 11. 2. ノンブル 160
- 11. 3. 柱 162

12 校正作業

—— 163

- 12. 1. 文字校正 163
- 12. 2. 初校ゲラ(1) 引き合わせ 165
- 12. 3. 初校ゲラ(2) 素読み 167
- 12. 4. 再校ゲラ・三校ゲラ・校了 169
- 12. 5. 色校正 171

13 印刷の工程

—— 173

- 13. 1. 印刷前工程(1) 面付け 173
- 13. 2. 印刷前工程(2) トンボ・背標・背丁 175
- 13. 3. 印刷前工程(3) 刷版の作製 177
- 13. 4. 印刷(1) 印刷の方式 179
- 13. 5. 印刷(2) 枚葉機と刷本 182

14 製本の工程

—— 185

- 14. 1. 刷本と折丁 185
- 14. 2. 折り加工 187
- 14. 3. 折丁の綴じ加工(1) 糸かがり綴じ 190
- 14. 4. 折丁の綴じ加工(2) 接着剤綴じ 191
- 14. 5. 折丁の綴じ加工(3) 針金綴じ 193
- 14. 6. 表紙の装合(1) 背固め前工程 195
- 14. 7. 表紙の装合(2) 背固め 197
- 14. 8. 表紙の装合(3) くるみ製本 200

おわりに —— 207

索引 210

主要参考文献一覧 220

編集の実務と
印刷・紙・製本

1

書籍と雑誌

- 1.1. 書籍(1) 定義
- 1.2. 書籍(2) 版と刷
- 1.3. 雑誌(1) 定義
- 1.4. 雑誌(2) 継続性
- 1.5. 雑誌(3) 広告掲載

1.1. 書籍(1) 定義

一般に出版物は「書籍」と「雑誌」とに大別されます。この章では「紙の出版物」に限定して、書籍と雑誌のそれぞれの特徴を掘り下げます。

まず書籍の基本的な特徴は、(1) 単独の著者による、ひとまとまりの体系的な内容をもち、(2) 比較的に堅牢な造本のもとで相当量のページ数を有して、単発刊行され、(3) そのつど一定数の読者を獲得する、という点にあります。

一人の著者の手になる言説や物語は、一貫した叙述をもちます。その内容は千差万別で事々物々に筆が及び、他に容易に代替されるものではありません。記述が類をみない独自性を保てば保つほど、読者対象が絞

り込まれ、発行部数は限定されてしまいがちです。流布される数量は少ないながらも、中身の多様性から取りどりの書籍が上梓されてバラエティに富む傾向にあります。ときに、その確たるコンテンツは、地域をまたいで他言語に翻訳されて広まったり、長いあいだ読み継がれて古典に昇華したりする事例があります。場所を変えても時間を経ても、読むたびに新しい発見や忘我の境地を古今東西の読者に供するのです。

繰り返し書架から出し入れされることを想定して、堅牢な造本となっている点も見逃せません。幾度となく掌がふれれば蔵書への愛着はいや増すのです。ぬいぐるみやフィギュアと同じように、指先でさわることのできるものは生き残ります。ふれるという感覚は、匂いととも、動物としてのヒトがもつ、もっとも原始的な認知作用だからです。

平手でつかみうる相当量のページ数を有し——国際標準規格ISO9707の定義では、書籍は表紙を除き49ページ以上。ちなみに、48ページ以下で5ページ以上はパンフレット。4ページ以下はリーフレット——、そうしたページの全体は冊子体として製本加工されています。冊子体とは、同一大の四角形に切った紙葉を束ね、その一辺を綴じ合わせた形態です。書籍の多くが縦位置（vertical position）にあり、冊子体として天地方向の長辺のひとつが綴じ合わされています。鉛直に立てたとき内部に重力をもつオブジェなのです。電気仕掛けではありません。

いま、本を読んで理解できる年齢の人口を、かりに日本では1億人とするのならば、ミリオン=セラーの100万という数字は実はたったの1%でしかありません。人気のあるTVドラマの視聴率が20%を越えると、かりに日本の世帯数を5,000万世帯とすれば、1,000万世帯以上に視聴されている事例にみるように、あるいは、音楽配信サイトで爆発的にヒ

ットしたという一つの証（あかし）が、もはや世界規模で1億回再生であるように、有線・無線の通信回線によりコンテンツを送受信するネットワーク型のテレビ放送やインターネット配信に比べると、書籍というパッケージ型の商品はかなり地味な存在であり、ごく少数の読者に限定されて受容されているという事実がわかります。

書籍はまた他に代替の効かない商品です。多くの工業製品は決められた規格のなかでナンバー=ワンを競うのですが、書籍の場合はオンリー=ワンのみです。村上春樹の小説が書店に見当たらないからといって、村上龍のエッセイを代わりに買って読めばそれで済むなどとは、絶対にありえません。ただし、いくら村上春樹の大ファンだといっても、生涯にわたって春樹作品だけを読み続けて暮らすわけにはいかないのです。個人の趣味嗜好は年輪を重ねれば変転するものなので、読者ニーズに逐一対応した豊富な選択肢が必要となります。

千姿万態が求められる出版の世界で、一人勝ちはありません。半世紀以上も前に書かれた作品であっても、復刻版や文庫化でリバイバルし、価値が減ることなく新しい商品として通用したりもします。ときには出版社の側が、この作品を多くの人に知ってもらいたいとか、この企画は埋もれてはならないといったように、強固な志（こころざし）を掲げて出版活動に踏み出す事例があります。これまでにない内容を世に問うことからして多様性の幅を広げており、そこには賭博的な要素が非常に大きいのですが、それもまた出版業の一つの魅力となっています。

単著の単行書で代替の効かない少量生産というのが書籍の本質ですが、実際のところの有りようは実に各種各様です。基本的な特質から外れた「例外的な書籍」の類いもまた数多くみられるのです。一冊のなか

に複数作品を収録した合集，継続して刊行されるセットものやシリーズもの，カジュアルな造本の文庫や新書，ビジュアル主体の絵本・図鑑・画集，単年度で消費される学習参考書・資格検定書・旅行案内書，それに，流通上で雑誌扱いされるコミックスやムック，などです。要は，書籍に雑誌的な要素が加味されて変則的な出版物が生まれたのです。

なお，「書籍」「図書」「本」「冊子」「書物」「典籍」といった語は，みな同義です。出版の世界では「書籍」の語を用い，図書館界は「図書」と呼称しています。

1.2. 書籍(2) 版と刷

ところで——少量ながらも複製品である書籍においては，「版(はん)」という概念が重要です。**版** (edition, version) とは，本来は，出版物の印刷時にインクを塗布する面をいいました。紙面にインクを転写するための，印刷用原版 (printing plate) の意です。

印刷用原版は，木版印刷であれば文字を彫りつけた板材であり，活版印刷では金属活字を型枠に嵌めて組み上げた活字原版，あるいは，いったん紙型を経てつくられた鉛版です。平版オフセット印刷であれば，版下台紙を製版カメラで撮影しフィルムを介して焼き付けるか，あるいは，面付け済みのデータを直接に焼き付けた，アルミ素材の刷版です。

この印刷用原版という原義から転じて，版の意味は，(1)版に盛られている「内容」を指し示すとともに，(2)その内容を世に問うための「出版形態」の意も含むようになりました。

前者(1)の版は、英語では「edition (エディション)」です。版に盛られている「内容」とは、換言すれば、同じ出版社のもとで、同一の印刷用原版から何度も複製される、コピーの全体です。

版(エディション)が同じならば、出版内容はすべて同一であり、出版物としての造本・用紙・組版体裁なども同じです。最初の原版からのすべてのコピーを「初版」(あるいは「第1版」といい、内容そのものに実質的な変更や加筆がなされて原版のもつ文字列が大きく更新されれば、「第2版」「第3版」と、改変の順序を表示します。序数ではなく「改訂版」「補訂版」「増補版」「新訂版」などの言い回しを用いることもあり、版歴の表示に関する明確な決まりはありません。

すなわち、前者(1)の版(エディション)の表示は、当初の内容が時系列にそって大きく改変されていく順を示しており、更新されたものを総じて「別版」「別版本」「別本」と称します。内容は変更されていますが、引き続き同じ出版社から刊行されており、造本・用紙・組版体裁も同じです。ただし、文字列の増減で一部の組版体裁がズレていたり、ページが変わっていたりという事実はあります。

後者(2)の版は、英語では「version (バージョン)」です。原版の内容を世に問うための「出版形態」とは、同じ内容でありながらも、外装・版元・媒体を異にしている出版物を意味しています。

異相はまず、造本・用紙・組版体裁に見出され、「総革版」や「文庫版」のような外装・造形の違いとなります。さらに、古刊本の「駿河版」や「五山版」のように印刷所・出版社の異同、あるいは「印刷版」「オンライン版」といったメディアの隔たりが、この版(バージョン)での表示です。「復刻版(覆刻版)」も、版(バージョン)の表示に含まれます。

おわりに

電子書籍 (digital book) は、デジタル化された文字ベースのコンテンツが、配信事業者からインターネットを介して閲覧用の端末機器に配信され、本を読む疑似体験のできる仕組みをいいます。ネット経由の配信だけでなく、CD-ROMのような外部記録媒体に文字データが蓄積され、オフラインで閲覧するタイプも含むことがあります。

コンテンツの代表例は、商用販売の旧刊書が配信事業者などの手で二次利用されたものです。それ以外にも、著作権の消滅したパブリックドメイン作品や、著作権の保護期間が残っているものの権利者不詳の絶版本が、国立図書館を始めとする公益的な事業体によってデジタル化されています。商用の最新刊が著者許諾のもと即座に配信される事例や、同好者による小説投稿サイト上でのウェブ文芸の類もあります。

電子書籍では、コンテンツのファイル形式、閲覧用ソフトウェアの種類、端末の指定機種についての確認が必要です。閲覧がダウンロード方式かレンタル方式かも確かめなければなりません。

冒頭で「本を読む疑似体験」と定義したのは、これまでの読書体験とは一線を画すからです。端末の画面で文字を追うのは「読む」というより「見る」という感覚であって、すでに見知っている言葉だけを目にとめ、わかりやすい表現のみを好んでしまいます。一字一句に「ピントを

合わせる」よりは「斜めに受け流す」という視線の動きに近く、長文の内容を深く吟味するいとまもなく、その場その場で好きか嫌いかの選別を図り、自分の信じた文脈ばかりに没入しがちです。

電子書籍は「所有」が難しいのも特筆すべき点です。レンタル方式は配信プラットフォームへのアクセス許可を得たということであり、オフラインでの利用はできません。ダウンロード方式でも、事業者側の都合で一定の年月を経た後に端末機器のデータが消えてしまう可能性を否認しません。そのときにかぎって「再ダウンロード」が無効で、改めて「購入」しようにも、登録作品そのものがすでに削除されていたりするのです。アーカイブ機能は、万全とはいいたいところがあります。

もちろん、電子書籍の利点は十分にあります。通信インフラが整っていて、端末とソフトウェアが正常であって、豊富な電力が供給されていれば、このうえなく便利で、融通の利くメディアです。嵩張らず場所を取らず、持ち運びも簡便です。機能的には、文字サイズの拡大、画面の明るさ調整、コンテンツ内の文字検索、文字列のハイライト表示、ブックマークの指定、AI音声での読み上げ、別端末とのページ同期などができます。テクノロジーに裏打ちされた利便性は計りしれません。

生まれて初めて手にしたのが絵本ではなくタブレットという人が増えて、液晶画面で文字や映像を追うのに身体のほうが馴致して何ら抵抗を感じない世紀を迎えています。おそらくは電子書籍に向き合ってみてわかる「紙の本」の価値があるし、逆もまた然りなのかもしれません。両者は引き算の関係ではなく、補完し合う部分は確実にあります。

ところで——図書館はデジタル化にどう対処しているのでしょうか。館種によって方針が違い、個別の館の事情も異なるでしょうが、ここで

は大きく、学術研究の図書館と行政サービスの図書館とに二分したうえで、個人的な所見をしるします。

前者の学術図書館は、科学的根拠に基づく最新知見の提供をサポートすべき拠点です。研究者のあいだでは、最先端の成果を公表し先取権を確保する国際的な競争が展開されており、発表の場も、書籍より雑誌、それも最新号に掲載の論文、さらには紙媒体よりも電子ジャーナルへと変転し、研究活動のサイクルを著しく短縮させてきました。とりわけ医学薬学・技術工学・実験科学の分野では、最新の査読論文をデジタル化して流通させ、無料であって、なおかつ制約のない利用を保証するという、オープン=アクセス運動が続いています。学術研究の図書館は、そこに全力で取り組まねばならないでしょう。

一方で行政サービスの図書館は、行政の一端を担う以上、市場の容赦ない選別と序列化からは距離を置き、社会の弱者に手を差し伸べて、どんな利用者も取りこぼさない居場所であれかしと願うばかりです。新しい技術や時代の変容に追いついていけないと不安感にさいなまれている人に向けて、手に馴染み、目に親しんだ、これまでと変わらない書籍を提供し続け、旧来の読書体験を守ってあげてほしい。行政の図書館は常に世の中のしんがりを照らす灯台として、一人の落ちこぼれも出さないという真っ当な使命をひたすら愚直に果たすべきと念じます。

読書の仕方は百人百様のかたちがあります。簡単に理想化できるほど単純なものではないかもしれませんが。ただ、内面の生活を豊かにする方向にこそ、読書はあると断言できます。だれかと競うためではなく、他人にみせびらかすものでもなく、ひとえに自分ひとりを満たすことができれば、人は幸福でいられるのです。何も恐れるに及びません。■

図書館のための出版キイノート3 編集の実務と印刷・紙・製本

2024年6月18日 初版第1刷発行

検印廃止

著者 宮沢厚雄
発行者 大塚栄一

発行所 株式会社 樹村房
〒112-0002
東京都文京区小石川5丁目11番7号
電話 03-3868-7321
FAX 03-6801-5202
<https://www.jusonbo.co.jp/>
振替口座 00190-3-93169

表紙デザイン／宮沢厚雄
本文組版／BERTH Office
印刷・製本／亜細亜印刷株式会社

©MMXXIV MIYASAWA, ATSUO Printed in JAPAN

ISBN978-4-88367-397-1

乱丁・落丁本は小社にてお取り替えいたします。

同じ著者による既刊図書
〈三部作〉キイノート
「わたしが学ぶ」を応援する

分類法キイノート 第3版補訂

日本十進分類法[新訂10版]対応

B5判／104頁／定価1,650円(税込)／ISBN978-4-88367-343-8

目録法キイノート

日本目録規則[1987年版改訂3版]対応

B5判／104頁／定価1,650円(税込)／ISBN978-4-88367-260-8

検索法キイノート

図書館情報検索サービス対応

B5判／144頁／定価1,980円(税込)／ISBN978-4-88367-290-5

〈三部作〉キイノートの
解答と解説の合冊集
「ひとりで学ぶ」を実践する

解答・解説サポート 試験問題公開

三部作(分類法・目録法・検索法)「キイノート」対応

B5判／192頁／定価4,400円(税込)／本書は直販品扱いです。
入手方法につきましては、小社に直接お問い合わせください。

